

工作場で作られて配給されたに對し、我國のものは個々の寺院や宮殿の建築が考慮されて夫々に焼かれたものであることが述べられてゐる。著者の「系列」観は更にその「形式」観によつて組織立てられたものであるが、かゝる著者の「形式」観の端的に示されたものが「端方積藏校禁の成立に對する考古學上の一考察」、「傳殷墟發見の銅製品に就いて」、「殷墟出土の白色土器に就いて」である。かくて著者の「形式」観、「系列」観は獨自な意味をもつて来る。次に編中の「殷墟出土の一古琮」、「河南安陽出土と推定せられる二個の尊彝」、「支那古明器の一新資料」、「支那漢代の玻璃」、「支那發見の漢代の漆奩」、「支那發見古代漆器の新材料」、「傳長沙出土の木彫怪獸像」の諸篇は何れも斷片的資料の正確な記述による報告である。現在の支那本土の考古學的研究に於いては主としてかゝる斷片的資料によらねばならず、遺跡と一括遺物の殆んど不明なるに對して、たゞ僅かに不十分とは云へ安陽と金村とが例外をなしている。「河南安陽と金村の古墓」がその説明として興味深い。

本書の諸篇は何れも著者が歐米より歸朝後の研究發表であるが本書の最後の三篇は歐・米・露に於ける博物館中心の彼地支那考古學研究の状態を述べたものである。その記述の系統あることによつて、本書にもられた著者の考察が歐米遊學の際育まれて發展したものであることを充分察せしめる。

以上専ら本書の内容を述べ來つたが直ちに看取できることは、著者の「形式」観、「系列」観が獨自の立場に於いて一應きはまつた完璧の體系を示してゐることである。著者はかつて考へに餘裕と

發展を與へるべく、しばらく眼を他に轉じたいと云はれてゐたのを自分は覺えてゐる。さうした言葉を併せ考へる時本書の出版が自分には一段と意義深く感ぜられるし、又學界も等しく著者の次の發展を期待してゐることを信ずる。最後に適切豊富な圖版と卷末の索引とが又本書の特色をなしてゐることを附記する。(菊判、本文五九三頁、圖版一五五、昭和十三年十月、京師弘文堂發行、定價七〇〇)〔澤田正一〕

赤峰紅山後

滿洲國熱河省赤峰紅山後先史遺蹟

東方考古學叢刊 甲種第六册

東亞考古學會編

熱河といへば承德の離宮を思ふほど、事變以來この地も人々に親しいものになつたが、われ／＼はまた別な意味でかねてから熱河の地にあこがれを抱いて來た。考古學教室の陳列室にある、赤峰の牟田氏から寄贈を受けた青銅器その他の一群の遺物が、この地への興味を誘ふからである。昭和十年初夏、久しい希望は實現されて東亞考古學會がこゝに發掘を試みることとなり、故濱田先生は自ら諸氏をひきゐて調査の事に當られたのであるが、その結果は豫期した石槨墓群の發掘以外に、彩文土器の新遺蹟を發見するなど、非常な收穫を得て歸國せられたのであつた。本書はそれらの調査研究の結果を一本にまとめたものである。

本書の内容は濱田耕作・水野清一兩氏の筆になる「滿洲國熱河

省赤峰紅山後先史遺蹟」を主篇とする。これは章を分つこと七、第一章序説において赤峰紅山調査の沿革と今回の旅行の経過を記し、第二章には當初の調査目的たる石櫛墓二十六基の發掘結果を述べて、一墓に土器一個・利器一二種もしくは裝身具一二種といふ副葬品の少ないこの種の簡單な墳墓にも、なほ被葬者の性別と伴出遺物との間にある約束の存すること、或はこれに牛・羊・豕・鹿等の獸骨を副葬する例多く、四肢骨特に左側上膊骨を用ふるを原則とし、また上膊骨二個の場合には必ず種別を異にし、かつその一は常に犬である點などを擧げて、儀禮的埋葬の行はれたことを注意してゐる。第三章は石櫛墓と同じ文化を示す住地の調査を録し、種々の遺物を擧げてそれが既に金石併用文化といふよりむしろ初期青銅器文化であり、且つかなり支那風なものであつたと思はれること、土器は赤色磨研土器(紅陶)を主とし、この地の一部で赤色繩席文土器に移行してゐるのは、秦漢式の黝色繩席文土器の影響であらうと推測せられた。第四章は新發見の彩文土器文化の住地について記し、赤色良質土器と黒褐色粗質土器との二種について詳記し、金屬器の發見なく石器の盛行する事實によつてこれを新石器文化と斷じてゐる。

さて第五章においては東亞における彩陶の問題より説きおこして赤峰第一次文化の性質を考察し、赤峰彩文土器は甘肅土器の最盛期にこれより派生したもので、河南群とは姉妹關係にあるものと考へ、これに伴出する粗質土器は南方に類縁を見出しがたく、かへつて北方歐亞にわたる新石器時代の櫛目文土器との一致が考へ

られると説き、次いで石器を通じて農耕の存在を推し、獸骨によつて家畜飼養を斷じ、周縁文化との關係に及んで南方・北方に對して受動的であり、東方に對して能動的であつたことを論述してゐる。第六章は赤峰第二次文化即ち石櫛墓のそれが土器においては紅陶文化の一系を建て得べく、牧養を生業とし農耕の證據はないが定住生活を營んだことを推し、青銅器の性質は緩遠青銅器文化の一變種であり、その東端の一族であつて、南方文化との交渉を有するも、東方との關係は青銅器において滿鮮に對立し、土器・石器において共通するものを持つと論じてゐる。第七章結言においては第一次第二次兩文化を比較して、その間に通じた連聯を考へ得るも、土器においても石器においてもその間隙を填むべき資料のないことを注意し、第二次文化の發生をこの地以外に求むるの他なしとし、しかも人種においては大なる變動なく、生業の推移は土地の乾燥化による農耕の衰退であると見た。更に史書に傳ふる東胡の習俗の第二次文化の生活を髣髴せしめるものを擧げて、とにかく新石器時代まで遡れば、北支那から蒙疆・興安嶺の東西に至る一帯は彩陶人とも稱ふべき相似た體質の、相似た民族に由つて占據されてゐた。それは恐らく西曆前二千年に遡り得るであらう。然るに前五百年頃になれば最早や黃河の中原には漢民族が成立し、熱河方面には東胡民族が成立し、そして滬河・洮河の甘肅には氐羗民族が成立し、それぞれ特有な文化を有し、相對立するに至つた。併し、なほ體質的には相近似してゐたことを今次の發掘が闡明したのである。」と結んでゐる。

遺蹟遺物の記載に完成した技術を發揮してゐるのは本叢書の常に高く評價される所以であるが、本書において著者は更に遺蹟遺物を通じて生活を考へ、文化を人生に即して眺めようとする意圖を強く示してゐる。さうしてそれが本書において成功してゐるが故に、かへつてわれ／＼は學問としての考古學の局限の問題を想起せずには居られないのである。考古學として更に進んでこの境地を超えることは不可能であらうか。

尙本書には附録として、三宅宗悦・吉見恒雄・難波光重諸氏の「赤峰紅山後石礪墓人骨の人類學的研究」、直良信夫氏の「赤峰紅山後出土鳥獸骨」、磯松嶺造氏の「赤峰紅山後先史土器の技術的觀察」の三篇が添へられてゐる。多數の原色版を使用して豪華な装ひをこらした本書を見るにつけ、健康を害して病室に移られた後にも親しく朱筆をとつて、四校五校と校正のことにまで心を盡くされた著者の一人たる濱田先生が、つひにその完成を一步前にして世を去られ、この書を悲しい記念として遺されたことを思うては洵に哀惜の情に堪へぬ次第である。四六四倍版、本文一三一頁、英文概要一三頁、圖版四七葉、東亞考古學會發行、定價二〇・〇〇（小林行雄）

彌生式土器聚成圖錄正編

森本六爾・小林行雄編

「一粒の糶、若し地にこぼれ落ちたならば、遂にたゞ一粒の糶に終らないであらう」と嘗て編者の一人たる森本氏は彌生式土器の

面に印された一粒の糶を見て叫んだが、今日日本石器時代文化の性格、就中彌生式文化に於ける生業問題の進展は、全く此の一粒の糶痕の觀察から發したと言つてよいのである。東京考古學會の創設者たる森本六爾氏は彌生式文化の本質を把握することを一の中心對象としたのである。而して氏はその基礎的工作の協力者として豫て同土器の形態の實測に専念してゐた小林行雄氏を得たのであつた。不幸にも森本氏は其の業の途中で他界したが、小林氏はその後京都帝大考古學教室に勤務する傍、よくこれを繼承して同人藤澤一夫氏、藤森榮一氏等の援助を受けて當初の意企を完成させたのが本書である。而して故濱田博士が本書の出版に對して援助をあたへられ、其の努力にふさはしい外容を以て世に出た所は編者の満足とする所であらう。前後數年に互る小林氏等の熱心に依つて出来上つた本書は次いで世に出る解説篇と併せて主として氏の彌生式土器に關する見解を發表せるものとして、これが單なる聚成圖錄であり乍ら特殊の意味をもつものである。先づ集むる所の日本内地の彌生式土器一二九六箇をば氏は北九州・南九州・東九州・西部瀬戸内地方・山陰地方・中部瀬戸内地方・畿内地方・琵琶湖地方・伊勢灣地方・中部高地地方・駿河灣地方・南關東地方の十二地域に區分して聚成してゐる。更にこの材料たる土器に就いては發掘者實測者並びに參考文獻を各々別々に登錄した目録を附してゐる。器の一々の實測が一面技術家として優れてゐる小林氏の手になる事よりして單なる一破片からも全體を推定し得るまでに製圖されてゐる點は喜こばしく更に本書には主要遺